
とある暁の都市平和（パクス・シティーニア）

平井純謫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある暁の都市平和パクス・シティーニア

【Zコード】

Z0299S

【作者名】

平井純謙

【あらすじ】

尾獣事件から数カ月たつたある日。

サソリといつものメンバーの変わらぬ日常が新たな転生者によつて一変した。

ナルトの世界で大暴れした「暁」のメンバーがほとんど転生してきてサソリ達の波乱な日常がスタート。

果たして彼らは本当の平和を手に入れることが出来るか？

1・せじめつ…（繪書わ）

監修者…

帰つておもしたよ！－！

いよいよ元結編に着手しました。

意見や感想を待っています。

1・はじめ

学園都市を震撼させた「尾獸事件^{テイルビースト}」から数ヶ月経ち、都市は以前のような賑わいを取り戻しつつあった。

忍の世界から転生してきた天才傀儡師「サソリ」といつものメンバーによる何もない日常を綴つた物語です。
そして、新たなる転生者が……

* * * * *

学園都市の中で佐天が住んでいる部屋の一室で天才造形師という異名を持つ「赤砂のサソリ」が熱心に机に向かって巻物に何かを書いている。

「よし……終わった」

何やら古典的な言葉と真ん中に大きく描かれたゝゝ人ゝゝといふ字が目立つ。

サソリが習字道具を片付けていると朝食の用意をしている佐天が部屋に入ってきた。

居間の扉とサソリは向かい合ひつようになじみながら作業していたため佐天にとつて巻物は逆さ文字に見える。

「何やつてんの？つわつ！…難しそう……」

黒墨が付いた筆を余った紙でふき取つてゐるサソリが言つ。

「いや……そろそろアイツを片付けないとマズいだろ……」

サソリが指したのはタンスの横で静かに横たわる「畜生道」と呼ばれる女性だ。

畜生道……NARUTO原作でペイン六道の一人として登場した。

前作の尾獸事件で活躍した女性です。

橙色の髪の毛に暁の組織服を着ていて身体中にチャクラを受信するアンテナが植付けられている。

「それね……結構夜中に見ると怖かつたわ」

「てつきり尾獸の件が終わればペインが持つて帰つてくれるかと思つたが…全然、消える気配がないから…」「

赤い頭をポリポリ搔きながら首を傾げる。

そしてサソリの眼に宿るのは、忍術の祖「六道仙人」と暁のリーダーが開眼していた「輪廻眼」がある。

そのため、俺はあらゆる忍術が扱える。

と説明されたが傀儡を専門に忍術を行つてきたから…他の忍術がどんなんだつたか？

と考えると進まなくなる。

それに都市の中でふつ放すのはさすがにダメだり…また白井が来てしまう

よつて、新術開発や練習ができるない。

だけどこんな世の中で使う機会なんてそうそつ……

「つで…！不思議な能力でボボンと片付けられるんでしょ…！…？やつて見せて！」

佐天の眼がキラキラ輝いているのがサソリにも伝わる。

「いや…それが問題だ…」

「？」

佐天は首を傾げた。

そりや…佐天の小さい頃から使つてている習字道具を借りてみたけど。「俺が書いたのは、口寄せの術式という奴なんだが…これは遠くにいるモノを呼び出す忍術だ…」

「…口寄せ…？…サソリの人形を出す時に使つてたのだ！！凄いスゴイ！！」

佐天のテンションが急激に上がり顔が紅潮している。

「あのなお前…俺の言つてる意味が分かるか？」

「？」

あつ！…分かつてなかつた…。

「だから遠くにあるモノをいつでも引き出せるのが口寄せ…つまり置き場所の根本的な解決になつてないんだよ…」

サソリが軽いジェスチャーを交えて説明する。

すると佐天は納得したように「おおつー！」と言つが刹那「ダメじ

ゃんー！」と驚くように言つ。

「…さつきからそれを悩んでいたんだよ…どうすっかな、何処に置くかな…」

「フウエイさんの所はどうなの？」

フウエイ……前作でサソリの傀儡「三代目 風影」とレールガン二と御坂美琴のDNAを複合して生まれた存在。

現在、空き研究所に住んでいる。

時々来ては、よく分からぬお土産を渡してくれる。

「やだよ…アイツの研究所に置いたら絶対改造されそудだし…」

御坂の顔に傀儡で着ていた黒い装束のフウエイ（マスター…ミサイルを打てるようにしましたよー！サービスで眼からビームも…）

佐天が苦笑いを浮かべて妄想をかき消すように首を横に振った。

「何だかんだで輪廻眼も必要な時に役に立たないんだな…見るだけ吸い込んで異空間に置けるとか…」

自分の手をじっと見る。

「そんなことの為に異空間作らないでよーれつ、早く朝食を食べて行けりつよ。初春と会う約束してんだからー。」

「やつか…初春の所に置いてみるが…」

「止めなよー！新手の嫌がらせよ」

* * * * *

とあるビルの屋上

「変わった里スね…」

黄色く長い髪に両手の掌から口が浮き出でだらしなく舌を出してい る男が言った。

「オイラの芸術を知らしめるこなお逃え向きだりばりばり……「ひ」と 鞄から起爆粘土を取り出して掌の口に押し込んだ。

「そこまでにしておけ…『デイダラ…』

橙色のツンツンとした髪型の男が止める。

「冗談だ…うん…ここにいるんだり…サソリの田那がよ…うん」

ビルの上で都市全体を見渡していたデイダラとともに一人の男。 そして、デイダラは掌の口に押し込んだ起爆粘土を巨大な鳥へ変形させたそこに乗り込んだ。

「しかしよーーこんな形でオイラ達のリーダーに会えるなんて思つてなかつたぜ…うん。ペインの田那」

デイダラがそれだけ言つと学園都市の上空へ飛び出した。 残つたのは、曉のリーダーだったペインだけであった。

「…………」

その顔はいつになく複雑だ。

2、喫茶店でのドラマ（前書き）

2話目から暴走しておつますが問題ないです。

暁のメンバーとある科学のメンバーの絡みで希望があれば送って
ください。

今後の展開の参考にします。

なければ私のでドンドン進んでいくだけですが……

2、喫茶店でのドラマ

いつもの喫茶店へ

窓際のテーブルにサソリ、佐天、初春、白井、御坂がそれぞれ座り雑談をしていた。

学校での出来事や都市伝説といった類のことを主に佐天が先陣を切って話している。

それに対して、初春の反応は話し手に安心感を与えるようにリアクションをとつてくれて御坂は、「うんうん」と相槌を打つている。しかし、白井はメニュー表を眺めたりして聞き流しているようである。

ちなみにサソリは、前夜に新たな都市伝説を発見した佐天のハイテンションションに付き合わせられた為、今日の会話の八割は把握済み。

ボヤ～とした顔でサソリが外の様子を眺める。

「……という訳なのよ！凄い計画が予測されているんですよ！」
佐天が大きな身振りで説明を終えたようだ。

サソリは隣で一仕事終えてジュースを飲む佐天を見る。

「しかしねえー！噂の域を出ないから何とも言えないわ…」

「フフ…噂話しきを悔らないでくださいよ！前あつたティルビースト事件も実は予言されていたといつ話もあります」

「そんなわけないだろ……
と心で突っ込むサソリ。

「そうですね佐天さん！！されど噂話しだす」

初春が頼んだイチゴパフェにスプーンを差し込んだ。

「そういう話なら風紀委員の中でもありますのか……確かに、粘土男

ジャッジメント

クレイマン

のことですか……」

「どんな話ですか！？」

「わたくしもよく存じないのですが……芸術は爆発だ……みたいなことを言つて粘土を爆発させる能力者みたいですわよ

コップに入つてゐる氷がゆっくり溶けてカラーンといつ涼しげな音を立てる。

「変な能力者ね……それに聞いたことがないわ

「これも噂ですのよお姉様！」

白井の話に反応したのはサソリだった。

（随分、ディイダラの野郎に似ている奴がいるんだな……）

この時、全然気づかなかつたサソリであるが……三度窓の外を見ると……

往来する学生とは明らかに異質な空氣を醸しだしながら彷徨い歩く
橙色の髪をした男がいた。

……よく知つてゐる暁の外套を羽織つている。

ギョッとしてよく眼を凝らしてみてみる。

男は喫茶店からあまり離れないよう歩いては、数秒立ち止まって
歩き出すという奇妙な行動をしていた。

あれ……やっぱ何処かで見たことある奴だぞ……

しかし、次の男が振り返つた時に推測が確信に変わつた。

振り返つたことにより男の顔がサソリの位置から確認できた。
ツンツンとした橙色の髪に波紋のような輪廻眼、そしてピアスのよ
うに付けられたチャクラ送受信用のアンテナ。

……間違いない…ペインだ…

サソリは、テーブルに倒れこむような体勢になりながら「なんでもいるんだよ…」と咳くが幸い他のメンバーには気付かれてないようだ。とりあえず、かつて所属していた組織のリーダーを無視するわけにもいかないので…

「佐天…スマンがそこを退いてくれ…」

隣で議論している佐天を押し退けて一人男子トイレに消えていった。

「…？何かあつたのかな？」

「さあ…？」軽く佐天と初春が疑問の声を上げる。

男子トイレの中に入り込んだサソリは、袖から巻物を取り出して床に広げだす。「まさか、すぐに使う機会がくるとは……なるべく佐天達に気付かれないようにしたいものだが……」

中央に描かれている「人」字に手を重ねて「口寄せの術」と唱えた。

ボォン！…という音と共に白い煙が立ち込める。

すると橙色の伸びた髪とチャクラ送受信用のアンテナが付けられた畜生道が出現した。

輪廻眼の遠隔操作でペインとの接触を図るらしい。

まずは畜生道をトイレの外に出して時間差でサソリが出るが、男子トイレから畜生道という女性が出てきたのでお客様が数人驚いたようであたまをぱちくつさせた。

サソリは、何事もなかつたかのように席に戻り（佐天にもう一回譲つてもらう）輪廻眼での遠隔操作に集中する。

畜生道は、サソリの意志を受け継ぎそのまま喫茶店のドアをくぐつ

てペインが彷徨つている所に近づくために外に出た。

店員が首を傾げながら「ありがとうございました！！」という声が響かせるがそれどころではない。

畜生道はそのままペインの所に走つていき後ろ向きの彼の裾を掴み「何でいるの！？」とかわいらしい声で訊いた。

* * * * *

トイレから帰つてきたらブツブツ独り言を言つサソリを不思議そうに確認しながら御坂が佐天に質問した。

「なんかサソリが独り言始めたけど…大丈夫なの？」

別にボケたわけではない…

「おそらく畜生道の操作をしていると思いますよ…となればこの近くにいるはずですから探してみます？」

ティルビースト事件で4人はサソリにそんな能力があることを知つてゐる為、別段驚くこともなかつた。

しかし、サソリが断わりもなしにこのよつた行動をとることに興味が芽生えた4人は共にサソリの支配下にある畜生道さんの搜索が始まつた。

（サソリの支配下つて卑猥な表現だな…）と一人で赤くなる佐天だつたが誰にも気付かれなかつたのでセーフです。

店内を見渡す……橙色の頭なし！！（畜生道の判断基準らしい）

となれば店外か……とサソリを視界に捉えながら外を一望するが驚く程、簡単に見付かつた。

サソリの右側のガラス越しにまさかの橙色の畜生道と同じ髪色をし

たツンツンヘヤーの男性が会話しているのが分かつた。

しかし、残念ながら会話の声は喫茶店の強固なガラスに阻まれているため全く聽こえない。

4人はサソリに気付かれないようにヒソヒソ話で畜生道とあの橙ツンツンヘヤーの男性の正体について予想する。

「誰なんでしょう?...」

「あの感じですと昔別れた彼女ではありませんのよ……今更、復縁なんて難しいですわよ」

「一回、白井さんの案でやつてみますか!?!?」

ガラス越しのアフレコ!..

（橙色に愛を込めて）

配役

畜生道 白井黒子

橙色ツンツンヘヤー 男性 佐天涙子

ツンツン「会いたかったよ!!アンジェリーナ（畜生道さんのことです）!!もう一度やり直さないか」

佐天さんが頑張って男の子っぽい声を出す。

畜生道「ジョニー（ペインさんのことです）……それは無理で、」さいますわ……わたくしのお腹の中には、ボブから授かった命がありますの……」

ツンツン「なんだつて!!やつぱりボブと出来て……」

「カアアアトオオ!!なんじゃこれ！重つ!!…昼夜ドラか

なぜか白井の頭をポカーンと殴る御坂。

「痛いですの!!..」

「アンタがややこしくなるのよ……誰よボブって……」

テイク2)

「あの……やっぱり髪が同じ色ですから兄妹じゃないでしょうか?」

初春の意見に納得いつたように佐天が手をポンと叩いた。

「よし次は初春が畜生道役だ!! テイクツー!!」

引き裂かれた兄妹

～悲しき宿命～

配役

畜生道 初春 飾利

橙色ツンツンヘヤー 佐天 涙子

畜生道「会いたかったですぅ!! お兄さん!!」

ツンツン「アンジェリーナ(しつこいですが畜生道のことです)…

…」

畜生道「どうしたんですか? 7年も姿を消してしまって……でも、これから一緒に暮らしますね!!」

ツンツン「……ダメだ……ダメなんだアンジェリーナ! …俺は一緒に暮らせない…」

畜生道「何でですか!? 大丈夫ですよ! 私達はたった一つの繋がりなんですよ!!」

ツンツン「すまない…俺はこれから…魔王軍との戦争が…

「ストオオプウウ!! 何この急展開!! 魔王軍と戦いにいっちゃうの!!?」

「もう、御坂さん!! ダメですよちゃんと台本を読んできて貰わな

いと……これだから新人声優さんは……」

佐天がベテラン風の声優（おそらく15年間やつてるであろうのレベル）に成り切って言った。

「台本、最初からないでしょ………というかどれだけのドラマが喫茶店の前で展開しているのよ……」

一応の注意)

学園都市に魔王はいません……けど、一番怖いのは魔王ではなく人間の心なのです。

御坂さんのもつともな反論であるが……佐天さんも負けてないです。「少しくらい人間関係をこしょう……ないとアクセス数が伸びないですよ……やっぱ人間は大袈裟な話しが好きなんですから……」

「佐天さん、
『^{ひがゆう}誇張^{ひがゆう}ですよ……』」

×「しうつ 誇張

それから……

「じゃあ、御坂さんが主演で話を進めてみますか！」

勝負よ……

～ツンツンのあの人には届け～

配役

畜生道 御坂美琴

畜生道「今日といつ今日は決着をつけてやるんだからつ……勝負しなさいよ」

ツンツン繋がりで……読者の皆様には分かると思います。

3、畜生道大作戦（前書き）

やつと春らしいう陽気になりましたね……ポカポカとした日射しと新生活に思いを馳せます。

なんで畜生道をアンジョリーナにしたのか悩む（なんか古いネーミングだ）。

まあ、今回で登場も終わりだと思いつますけど…

3、畜生道大作戦

晴れ渡る学園都市のお昼近く。

元戦争請け負い組織「暁」のメンバーであつた「赤砂のサソリ」の目の前に現れたのは組織のリーダーである「ペイン」だつた。

……はてさてどうなるのでしょう？

* * * * *

畜生道の姿を借りて喫茶店の前にいるペインの着ている外套の裾を引っ張つた。

「何でいるの？…」

やつと出てきた一言がこれだつた。

ペインは、チャクラの質を確認するように輪廻眼を見開く。
「サソリか…よかつた…探知でこの近くにいることは分かったのだが…障害が多くな…何で畜生道の姿なんだ？」

かつて木の葉を襲撃した際の戦力の一つが自分に話しかけていると、いう奇妙な光景に思わず「ふつ…」と苦笑にも似たため息を吐き出す。

「…まあ、こっちにも都合があるから勝手に使わせて貰つていいだけだ…」

「そうか…最初の問い合わせたが…全員が集まつてから説明した方が手間が省けるだろ？…」

えつーーー全員ーーー？

畜生道の輪廻眼が大きく開き、嫌な汗がダラダラと出てくるのを感じた。

本体の方に意識を集中させてチラリと佐天達に視線を移す。

(ビビビ、ビッシュだよーー！アイシーリーのかよ……正直会いたくないんだけど！) かつての同僚として他里を襲撃した面々が集結するとなれば心情が揺さ振られるのは必然である。

「……勝負しなさいよーー！」

御坂が佐天に向けて指さして叫ぶ。

一応座つているので周りの目はそれほど気にななりません。

「また、お姉様はある類人猿のことですの…」

「御坂さんいきなり勝負を仕掛けた……はつーー最初は最悪の状態でスタートするのを立派なラブロマンスですねーー！」

「佐天さん…話がズレてる気がしますよ」

「やうかなー？…でも、やっぱ畜生道のキャラなら甘えん坊ですねーー！」

「そりですわね…お姉様やお兄様等の歳上の御方に愛嬌を振りまく女性ですの」

「ついでにドジとかもしますよねーー！」

「ああーー確かに（ですの）ーー！」

「アンタら畜生道の何を知っているのーー？…第一、畜生道操つてるのはつてサソリじゃんーー！」

サソリが一生懸命「ビッシュよしうか？」と悩んでいる隣では意味不明な会話が乱立して少々田畠を感じる。

(絶対に会わすとマズいみな……コイシーリーことだから質問攻めをしてくるだらう)

そう頭の中で意見をまとめたサソリは、これからのことを見直す。
ーションする。

まず、喫茶店の前にいるのはリスクが高過ぎるので畜生道を使ってペイン達を別の場所に移動させる。

（まあ、少し手が離せないとでも言つておけば通じるだろ？……）

次にペイン達を移動させたら佐天達に「用事が出来た……」とでも言つて抜けてくれればややこしい展開になるまい……

まあ……多少は演技力が必要だが、暁の組織に加わって幾度となく潜入任務に就いた経験があるから問題ないだろ？。

作戦の骨組みが出来た所でサソリは畜生道に意識を向けて話しを始める。

「いや……少し用事が立て込んでいるから場所を変え……」

「もしもおおしーー！」

サソリ本体に強烈な佐天の声が耳をつんざいた。
耳元で叫ばれたから「くわん、くわん」状態である。
まだ、余韻の残る耳を抑えてサソリがかみつく。

「何しすんだよーー？」

「だつてさつきから話しかけているのに無反応なんだもんーーところでさ、畜生道の性格ってどんな感じ？」

人の耳をダメにしておいて何だその質問……

「知らぬーよー！オレに振るなーー巻き込むなーー！」

つたぐ畜生道に意識向けた途端に変な質問してきやがつて……作戦

が失敗したらどう……あれ？ 畜生道が話さなによつて止めてたつ
け？ オレ…

「あれ…？あのシンシンの人がこちから気づいたようですよ」

初春の現状報告がサソリの身体の動きを鈍くさせた。

「本當ですかね…喫茶店でアンジェリーナ（畜生道のことです）と
話してもしたいのですわきつとー」

「サソリどうしたの？さつきから妙に顔色悪いけど」

落ちつけオレ……組織に入つてたこりはビル口（術者の身を守る傀
儡）に入つてただろ……顔なんて晒していいから大丈夫だ。

殺された時にメンバーのアロエさんに見られていたことは知らな
い。

慌て畜生道を操つてペインを再度誘導させようとするが…

「ティダラ…サソリを見付けた…」のままオレについてこい…

他の六道に連絡をしていた。
ギャアー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0299s/>

とある暁の都市平和（パクス・シティニア）

2011年10月9日23時44分発行